

平成 21 年 3 月 31 日現在

研究種目：若手研究 (B)
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18720042
 研究課題名 (和文) 源俊頼の和歌活動とその鎌倉時代における享受の研究
 研究課題名 (英文) A Study of Minamoto no Toshiyori (源俊頼)' s poetry and its influence on poets in the Kamakura period
 研究代表者
 吉野 朋美 (YOSHINO TOMOMI)
 中央大学・文学部・専任講師
 研究者番号：60401163

研究成果の概要：

3 年間の研究で、本研究での一つの目的であった院政期の歌人源俊頼の自撰家集『散木奇歌集』の全訳注として春・夏・悲嘆部・雑部上に取り組むことができ、俊頼詠の特徴を考察する機会を持てた。また、俊頼歌論のテキストデータ化、抜書本の調査もおこなうことができた。もう一つの目的であった、後世における源俊頼享受の実態については、中心に扱った後鳥羽院における俊頼の位置づけについて論文にまとめることができ、また和歌作品以外での俊頼享受の実態を示す新資料二点を報告することができた。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
平成 18 年度	1,200,000	0	1,200,000
平成 19 年度	500,000	0	500,000
平成 20 年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	120,000	2,220,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：

国文学、中世文学、和歌文学、源俊頼、
散木奇歌集、享受、後鳥羽院

1. 研究開始当初の背景

- (1) 院政期の代表的歌人である源俊頼については、早く、池田富蔵氏『源俊頼の研究』(桜楓社、昭和 48 年)に俊頼の伝記的研究を主とした体系的な研究が、関根慶子氏に『中古私家集の研究 伊勢・経信・俊頼の集』(風間書房、昭和 42 年)、『阿波本散木奇歌集 本文校異篇』(風間書房・昭和 54 年、大井洋子氏と共著)、『散木奇歌集 集注篇上下』(風間書房・平成 4 年・11 年、古屋孝子氏と共著)

など、校本や古注の集成を中心とした一連の研究があり、その基礎は固められてきていた。また、俊頼個別ではなく、時代の和歌を考えるなかで俊頼を取り上げその特質を考察された、橋本不美男氏『院政期の歌壇史研究——堀河院歌壇を形成した人々——』(武蔵野書院・昭和 41 年)、上野理氏『後拾遺集前後』(笠間書院・昭和 51 年)、藤原忠美氏『平安和歌史論——三代集時代の基調——』(桜楓社・昭和 41 年)、川村晃生氏『撰

関期和歌史の研究』(三弥井書店・平成3年)、錦仁氏『中世和歌の研究』(桜楓社・平成3年)などの成果が重ねられてきた。

今日でもその和歌表現の特質や『俊頼髓脳』をめぐる論考は散見するが、俊頼研究における最大の問題は、和歌文学史上重要な位置を占める歌人であるにもかかわらず、自撰家集『散木奇歌集』の全注釈がないということであった。冷泉家時雨亭叢書の刊行等によって『散木奇歌集』の新たな伝本も見つかった現在、その校異も含めて良質な本文を確定し、全注釈を進めることは、俊頼研究、ひいては同時代や後世の和歌表現研究の発展に寄与できると考えた。また、後世に大きな影響を与えている俊頼の歌論についても、その本文の検索ができない状態であったので、テキストデータ化を進めることで和歌の実作とのつながりが具体的に見いだせると考えたのが、本研究を申請した動機である。

- (2) これまで研究代表者自身は主に後鳥羽院の和歌の研究に取り組んできたが、院の和歌に関しては、藤原定家をはじめとする同時代歌人からの影響は広く指摘されているものの、前代、特に院政期頃の和歌をどう享受し、展開させていたかについては、寺島恒世氏校注『後鳥羽院御集』(和歌文学大系・平成9年・明治書院)に付された脚注で考える以外、あまり明らかにされてこなかった。そこで、後鳥羽院が後年記した『後鳥羽院御口伝』での言説や「俊頼影供」の実施などから特に評価していたと考えられる源俊頼の享受の様相を具体的に明らかにすることで、後鳥羽院における古典享受の一端を見極めようとしたものである。また、『新古今和歌集』撰集下命者にして実質的な撰者であった後鳥羽院を中心に据えることは、俊頼の和歌革新がもたらした功罪をわきまえて享受されたであろう新古今時代の歌壇のありようや好尚を知ることにもなると考えたことが、本研究に取り組もうとした背景である。

2. 研究の目的

- (1) 院政期の歌人源俊頼がその中心的な役割を果たした『堀河百首』の催行以来、そこで用いられた「題詠」と百首歌が公的な場における詠歌の基本的な様式となり、俊頼の詠歌に見られる新奇な素材や『万葉集』摂取の試みが『新古今和歌集』に結実したように、源俊頼の和歌活動は、それ以前の和歌の世界に革新をもたらした、その時代にとどまらない大きな

意義と問題を孕んでいる。本研究では第一に、俊頼固有の表現や用語に注意し、当時の歌人達の詠歌との相違点を見いだしながら『散木奇歌集』の全訳注を可能な限り進めてゆくことを目的とした。その際には、諸本を検討して最良の本文を確定し、新編国歌大観 CD-ROM の検索機能を生かして一首一首の特徴を明らかにしていくと同時に、表現や語句の類似や特殊性だけでは見えてこない発想や構想について、当時の知識人が披見していた文献を精査することによって(できるだけ当時の様態を留めている本文を蒐集した上で)明らかにしてゆくこと、また良質な本文を選んで『俊頼髓脳』を電子情報化し、実作とのつながりをより具体的に見てゆくことを目指した。

- (2) 後世の、特に後鳥羽院の言辭・実作の分析を通して、俊頼の何を評価し、何が受け入れられなかったのかを明らかにすることを目的とした。後鳥羽院に焦点を絞るのは、『後鳥羽院御口伝』で俊頼を近年の歌詠みの嚆矢として高く評価していることに加え、隠岐に配流された後鳥羽院が「俊頼影供」をおこない、俊頼を歌聖柿本人麿に匹敵するものとしていることが知られるからである。また『新古今集』撰集下命者にして実質的な撰者であった後鳥羽院を中心に据えることは、すなわち、新古今時代の歌壇のありようや好尚を知ることになるからであり、その時代は俊頼の和歌革新がもたらした功罪を弁えた上での享受がおこなわれているからでもある。時代に屹立した俊頼の和歌活動を深く理解した上で、和歌に至上の価値を置いた時代における享受の様相を具体的にとらえてゆくことによって、院政期から鎌倉初期における和歌文学を立体的に把握することを目的とした。

3. 研究の方法

- (1) 『散木奇歌集』の全訳注については、まず最良の本文を確定することが重要と考えた。そこで、先学の研究成果である『阿波本散木奇歌集 本文校異篇』、『散木奇歌集 集注篇上下』を参照しつつ、それらの本が上梓されてから後に報告された伝本の収集をすすめ、校異を取る作業をおこなうこととした。まずは国文学研究資料館で入手できる伝本の紙焼写真を集め、さらに必要に応じて伝本収集をすることとした。

注釈を付す際の方法としては、きわめてオーソドックスではあるが、俊頼の表

現の特徴や嗜好性を見極め、なおかつ前代までの和歌との関係、同時代和歌の影響関係などを考えておこなった。その際には、『俊頼髓脳』での俊頼自身の言説とそれとの整合性なども問題になると考えたため、同書をテキストデータ化することとした。一首の表現・語彙の共通性、特異性などを見極める際には、新編国歌大観や新編私家集大成の CD-ROM 等も活用しておこなうこととした。

- (2) 後鳥羽院の源俊頼享受の様相を探るためには、当然ながら、後鳥羽院の和歌について検討を加えなくてはならない。したがって、和歌文学大系『後鳥羽院御集』の脚注を参照しながら、後鳥羽院の歌のなかで俊頼詠の影響を受けたとおぼしき和歌を見いだす作業をおこなうこととした。同時に、後鳥羽院の言説、秀歌撰などの好尚を探り、それらを有機的に結ぶことを目標に取り組むこととした。
- また、後鳥羽院の俊頼享受の様相を探ると同時に、俊頼の享受を考える上では時代やジャンルをあまり限定せず、広く享受の様相をとらえていくことも重要であるとの認識に至り、二年目以降は鎌倉時代、また和歌に限定せず、対象の幅を広げて考えることとした。

4. 研究成果

- (1) 『散木奇歌集』の本文を確定するため、先学の研究成果である『阿波本散木奇歌集 本文校異篇』、『散木奇歌集 集注篇上下』を参照するのみならず、そこに収められなかった伝本の収集をはかるとともに、特に草稿本的性格を持ち、定家とその周辺で書写された重要な伝本である冷泉家時雨亭叢書『散木奇歌集』の校異を取る作業をおこなった（現在も継続中）。俊頼詠は難解な歌が多く、本文にも問題が多いため、本文の確定は慎重に進める必要があることがあらためて認識された。また、全訳注は、春・夏部、悲嘆部まで進め、雑部上にとりかかっているが、俊頼詠には語の意味から問題になる歌、注釈のつけにくい歌などがあり、訳注をつける作業には多くの時間を要することが明らかになった。なお、この成果は注釈書としての刊行を前提に進めており、現在までに終えた部分の注釈もすべての全訳注を終えてからの公表となることをお断りしたい。この注釈書が完成すれば、源俊頼のみならず、院政期の和歌の解説・研究に大きく寄与できる基礎的資料になるものと確信する。今後、本注釈書の刊行を早めるため、共同注釈者を迎え、さらに注釈を進めて

ゆく所存である。なお、注釈を付していく過程で得られた知見をもとに、俊頼の和歌表現の特徴、特異な表現や語を詠む和歌を通して目指していたことについて考えを深め、発表する機会を得た（学会発表①）。

また、注釈を付す作業をしていく際に、俊頼の歌論である『俊頼髓脳』での言説を対応させて考える必要があったため、『俊頼髓脳』の活字本（小学館新編古典文学全集『歌論集』）のテキストデータ化、および同書の異本『唯独自見抄』について、その私家版のテキストをデータ化し、俊頼に関心を持つ研究者に提供した（今後も要請に応じて提供する予定）。

さらに、伝本の調査の過程で、地方の国学者の『散木奇歌集』への関心・享受のありようが知られる福岡市博物館所蔵の青柳種信関係資料中『散木集抜書』を調査する機会を得ることができた。この報告はまだ発表できていないが（今年中の公刊を期す）、この抜書本の総体が解明できれば、どのような伝本が本居宣長門の国学者青柳種信の手にあったのか、種信自身の詠歌に影響があったかなどもわかり、ひいては近世国学・和歌の研究にも寄与できると考えている。

- (2) 後鳥羽院の源俊頼享受に関しては、その見通しを学会発表し（学会発表②）、文章化できたのが成果である（雑誌論文①③）。後鳥羽院に影響を与えた歌人と言えは同時代歌人がまず思い浮かぶが、その中で唯一、繰り返し名の挙げられる前代の院政期歌人が源俊頼である。本研究では、なぜ後鳥羽院が源俊頼の名を挙げるのか、『後鳥羽院御口伝』の記述、俊頼の秀歌二首と後鳥羽院の詠歌、院晩年の秀歌撰での撰歌、「俊頼影供」の催しといった後鳥羽院の和歌活動の総体から考える取り組みをおこなった。その結果、後鳥羽院の詠歌に大きな影響を与えた同時代の代表歌人である俊成・定家父子の俊頼に対する秀歌観や言説が、後鳥羽院の俊頼重視の姿勢につながったものであることを考察によって明らかにし得た。また、隠岐の後鳥羽院がおこなった特異な催しとして注目される「俊頼影供」については、同時期に催した五百首和歌と連動しており、影供という形式にした背景には、『柿本講式』に語られる同時代的な発想があるのではないかという見通しを立てるに至った。いずれも、単に後鳥羽院という一個人における俊頼一個人の享受にとどまらず、同時代の代表歌人の秀歌観や同時代的発想がかかわっていることを指摘した点で、

さらに大きな問題につながる成果であると考えている。

また、後世における源俊頼享受の実態については、俊頼の言説に関係する二点の新出資料を学界に紹介することができた点も大きな成果である（雑誌論文②④）。いずれも研究代表者が本研究の初年度に勤めていた研究室に所蔵されていた資料だが、それまで顧みられなかったり、新しく収められたりした資料であった。そのうち、発表論文④で紹介した資料『[鬼のしこ草]』は、『俊頼髓脳』に所収の説が室町時代の亡母追善供養法会の次第に引用されているものであった。近年学界で注目されている〈和歌と法会の関係〉がダイレクトに反映している資料であり、俊頼の研究のみならず、法会文芸や仏教・説話研究にも寄与できる報告がおこなえた。発表論文②で紹介したもう一点は、室町時代中期に聖護院門跡として、また文学者としても活躍した聖護院道興の書写になる『袖中最要抄』という新出の書物である。院政期の歌学書で頭昭著『袖中抄』を抄出した書物だが、『袖中抄』が検討の上挙げている『俊頼髓脳』の諸説が恣意的に扱われているなど、間接的だが『俊頼髓脳』の享受の様相を探る一助となるものと考えられる。また、本書はその抜き書きという形式からして、当時全国的に隆盛を極めていた連歌と何らかのかかわりがあると考えられ、当時の社会状況、和歌と連歌の関係を探っていく上でも重要な資料と思われる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

- ① 吉野朋美、「後鳥羽院における源俊頼——『後鳥羽院御口伝』から「俊頼影供」へ——」、『国語と国文学』（2008年度内に投稿、査読後掲載が決定しているが、掲載号は未定）、査読有
- ② 吉野朋美、「東京大学国文学研究室所蔵『袖中最要抄』について」、『東京大学国文学論集』第2号、49-61頁、2007年、査読無
- ③ 吉野朋美、「研究余滴 なぜ俊頼なのか——後鳥羽院「俊頼影供」をめぐって——」、『日本古典文学会々報別冊 日本古典文学会のあゆみ』109-110頁、2006年、査読無

- ④ 吉野朋美、「鬼のしこ草説話をめぐって——東京大学国文学研究室蔵『[鬼のしこ草]』の紹介と考察」、『東京大学国文学論集』第1号、17-32頁、2006年、査読無

〔学会発表〕（計2件）

- ① 吉野朋美、「源俊頼の企み——和歌表現の可能性をめぐって——」中央大学国文学会、2008年11月27日、於中央大学
- ② 吉野朋美、「後鳥羽院における源俊頼」、和歌文学会五月例会、2008年5月17日、於駒澤大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉野 朋美 (YOSHINO TOMOMI)
中央大学・文学部・専任講師
研究者番号：60401163

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

